

児童期における内的作業モデルの検討Ⅱ

— 親和動機との関連性 —

A discussion of Internal Working Model in preadolescence II.

— In relation to Affiliation motivate —

井手裕子

Yuko IDE

I. 問題と目的

Bowlby (1969) が提唱した愛着システムは、乳児が特定の養育者（母親）との関係のなかで形成される安全の絆である。子どもは、泣く、笑う等の行動に母親が応答的に関わる過程で、脅威や不安に対して母親に頼り、安心して自分を守ることができるという感覚を発達させていく。Bowlbyは、子どもは母親を、何かあったときに立ち戻る安全基地 (Ainsworth, 1978) として利用しながら外界を探索し、対人関係を広げていくとした。そしてこのような過程で、母親と子どもの自己との関係性が内在化された表象を内的作業モデル (Internal Working Model 以下 IWMと略記) として提唱し、その後の対人関係に反映していくものとした (Bowlby, 1969, 1973, 1980)。

この IWMについては、乳幼児の愛着を実験的分離場面 (strange situation procedure) によって大きく3分類したAinsworth (1978) の研究に始まり、Mainらの、半構造化面接 (Adult Attachment Interview (以下 AAIと記述)) によって判別する成人期の IWMの3分類 (secure (安定) 型, dismissing (回避) 型, preoccupied (とらわれ)

型) の研究 (Main et al., 1985; Koback & Sceery, 1988) 等が行われ、親から友人・異性関係と対象をひろげて IWMを見ていく流れとなっている。

本来乳幼児の母親との養育関係を反映する行動の様相として見られた愛着研究が、MainらのAAIによって幼児期の3分類を成人にも対応する研究が盛んに行われるようになったのは、IWMが認知機能として考えられているからである。

IWMは、元来認知心理学者 Creik の「外部の現実を小さなモデルのなかに取り入れ、よりよい行動を考え、様々な場面に安全に対処する」機能についての記述から発想され (Bretherton, 1985参照)、Bowlbyは子どもが母親との相互作用の経験をモデルとして取り入れ、同様の状況下で過去の出来事を想起して相手の行動の予測をたて、自分の行動を計画していく認知地図としての対人方略機能を持つとした (Bowlby, 1969)。ゆえにこの方略は、あくまで子どもの主観的な経験の認知が影響し、形成後は対人情報処理機能として無意識に自動的に働くことになる。

これらの考え方をもとに、Koback et al (1988) は大学生に対して AAI と Q-Sort

を行い、3分類されたIWMの根底にある苦痛記憶の処理と、行動特徴の関連性を示した。わが国においても戸田（1991）や遠藤（1992a；1992b）が、母親の応答性を通して防衛機能としての対人方略が組織化されると説明し、これがIWMの機能であると述べている。さらにその対人方略は、生後10年間で漸次的に安定し可塑性を減じていくとしている。また、詫摩ら（1988）は愛着スタイルと母親イメージとの関連性、母親と恋人のイメージ形容詞との類似性を見出した。

一方佐藤（1998）は、長期記憶内に貯蔵された非言語レベルと言語レベルの表象システムを区別し、愛着記憶ネットワークを情緒と関連づけ、IWMの型について構造面から説明した。さらに、愛着スタイルによる過去の情動経験の情報処理様式の差の検討（竹澤・小玉、2000・坂上・菅沼、2001）や、愛着に関する絵画をもとにした、情報処理の枠組の検討（古屋、2002）がなされている。

これらの研究は、青年期を対象としたものが多く、いずれもIWMがその後の対人関係に反映されていることを示唆したものである。そうであるとしたら、具体的な体験内での連続性（戸田、1991）によって確立されるIWMが、その途上で児童期にはどのような働きをなすのであろうか。

しかし、児童期そのものを対象としたIWM研究はいまだに数が少ない。そのなかで宮本（1997）は、児童期におけるIWMの特徴と母子関係との関係性を明らかにし、児童期のIWM形成過程を示唆した。井手（2004）は、この宮本（1997）をふまえ、IWMの特徴を発達の視点から考察し、母子関係との関連を示した。

ところで、児童期は心理的関係の対象を両親から同年齢の仲間、集団、親以外の大人に広げて集団の規範を共有し（前田、1992）、承

認されることが重要となるギャングエイジといわれるような仲間集団の構築期でもある。社会化と仲間関係についての研究によって、この時期の「親密性、親和性」や「必要感（受容・愛着）」が必要条件のひとつであることが論じられている（田中、1981・堂野、1999）。また、久保田（1995）は他者との相互作用が肯定的強化をもたらすか否かの期待が、その人の対人関係の基本的な次元となり親和傾向の程度を規程する（Mehrabian & Ksionzky, 1970, 1974）という見解を、BowlbyのIWMの概念に対応するものとし、青年期の親和動機との関連を検討した。

以上のような見解から、児童期のIWMは親和動機と密接に関連しながら仲間構築に反映すると考えられる。そこで本研究では、児童期におけるIWMが、親和動機とどのような関連性を持つかを検討することを目的とする。

親和動機の研究は、Mogan & Murry（1935）のTAT（絵画統覚検査）を尺度に達成動機との関連において検討されてきた。Shipleyら（1952）は消極的親和動機づけ（Aff-）である分離不安、拒否的追従と、積極的親和動機づけ（Aff+）である他者との積極的関係の確立、維持の2次元性（下山、1981参照）を示唆し、青年期では青柳・斉藤（1984）が成功回避動機と親和動機の関連を検討している。ここでの概念は、それらの研究の流れを軸とした「自分の味方になる人に近寄り、喜んで協力したり好意を交換すること」（宮本、1975参照）とし、上記の2次元性を基盤に検討していく。

Ⅱ. 方法

1. 対象

対象は、名古屋市内、春日井市内、千葉市、奈良市、広島市内の小学生（3～6年生）727

名である(表1)。

表1 アンケート回答人数 ()内は親和性尺度有効人数

	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
男子	68	78(77)	110	96	352(351)
女子	100(99)	72(71)	91(90)	112	375(372)
計	168	150	201	208	727(723)

2. 方法

尺度

- 1) I WM児童用尺度：宮本(1997)が、詫摩ら(1988)により作成された18項目を児童用に修正したものである。例えば詫摩ら(1988)の「私はわりあいたやすく人と親しくなる方だと思う。」という質問項目は、「知らない子ともすぐに仲よくなれます。」というように、児童にとってわかりやすいような簡単な言い回しになっている。
- 2) 親和動機付け尺度：児童のために下山(1981)が作成した26項目を用いた。分析基準は前述のようにShipley & Veroff (1952), Atkinson, Heyns & Veroff (1954) (下山, 1981参照)による基準を参照し、親和動機については因子分析によって因子I「友好関係を維持,あるいは拡大しようとする傾向」因子III「仲間からの別離や拒否に対する不安」因子IV「仲間に対する従順や服従の傾向」因子V「仲間に対する強調や協力の傾向」の4因子が抽出されている。

3. 実施手続き

小学校の了解を得、各教室で担任教師が配布し、無記名により集団実施した。実施時間は約40分であった。実施後は各自で封をし、回収した。

4. 分析

- 1) I WM児童用尺度については、先行研究に準拠し、「はい」、「わからない」、「いいえ」の3件法で回答を求め、3、2、1点

を与えて得点化した。分析方法は、宮本(1997)を準拠し、バリマックス回転を行ったが、さらに非線型主成分分析で因子分析を行った。その結果、構成要素がバリマックス回転によるそれと大方同様であったため、そのまま点数化を行った。

- 2) 親和動機付け尺度について、先行研究に準拠し、「とてもよくあてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」「どちらかと言えばあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4件法で回答を求め、項目の意味が動機付けの強い順に4、3、2、1点と得点化し、合計平均得点を因子得点とした。
- 3) 全体のI WM得点と親和性得点の相関を算出した。
- 4) 群分けによる分析を行った。「ambivalent」得点「secure」得点「avoidant」得点のうち、それぞれの因子得点の平均値が平均以上で、他2つの因子得点が平均未満であった者を抽出し、以下のように群分けして命名した。

「両価群」は「ambivalent」得点が平均値以上で、「secure」得点「avoidant」得点が平均値未満の者とした。「安定群」は「secure」得点が平均値以上で、「ambivalent」得点「avoidant」得点が平均値未満の者とした。「拒否群」は「avoidant」得点が平均値以上で、「ambivalent」得点「secure」得点が平均値未満の者とした。

- 5) 上記3群の学年と性別による分布について、学年(3、4、5、6年)、性別(男子、女子)で分け、カイ二乗検定を行った。
- 6) I WM群分け後267名について、親和性各因子ごとの合計平均値を因子得点として、群(「両価群」「安定群」「拒否群」)×学年(3、4、5、6年)×性別(男女)による3要因分散分析を行った。

Ⅲ. 結果

1. IWM尺度、親和動機尺の因子構造について

まず、IWMについて、全体データの因子分析（バリマックス回転）を行った。固有値1.0以上、因子負荷量0.30以上で項目の取捨

選択を繰り返し、最終的に、寄与率は23.6%と低いものの、「ambivalent」因子「secure」因子「avoidant」因子が抽出された（表2）。なお分析の詳細については、井手（2004）に報告済みである。

表2 IWM項目の因子分析（主因子法、バリマックス回転）

	第1因子	第2因子	第3因子	h ²
Ambivalent因子				
3 ときどき、友だちはほんとうは私をきらいだけれどしかたなく仲よくしてくれていると思います	.506	-.054	.139	.278
5 私は、ひとりでは何もできないとおもうことがあります	.345	-.096	-.059	.132
8 ときどき友だちがほんとうは私をきらいだと思っていないかと、しんばいになります	.538	-.022	-.011	.290
11 私がよいことをしても、わかってくれないことがあります	.300	-.036	.158	.116
17 いつもだれかといっしょにしようとするので、いやだとおもわれています	.441	-.149	.157	.242
18 私は、ダメな子だとよく思います	.555	-.190	.130	.361
secure因子				
1 知らない子ともすぐに仲よくなれます	.043	.514	.007	.266
4 友だちがすぐできます	-.065	.591	-.060	.358
9 みんな私を、すぐ好きになります	-.194	.509	-.219	.345
10 自分ひとりで何でもじょうずにできます	-.286	.326	.196	.226
12 どんなことがあっても、友だちは私をみすてないと思います	-.204	.346	-.207	.205
Avoidant因子				
2 あまり友だちと仲よくするのは好きではありません	-.043	-.159	.383	.172
6 みんな私におねがい事をするし、私もみんなにおねがい事をします	-.065	.263	-.334	.181
7 みんなのことがしんじられませんか	.163	-.087	0.506	.29
13 だれかにおねがい事をするのは好きではありません	.046	.023	.379	.146
15 いつまでも仲よくしたい友だちはいません	.014	-.103	.395	.167
16 ベタベタされたり、ベタベタしたいと言われるとイライラします	.198	.061	.314	.142
固有値	1.549	1.54	1.168	4.000
寄与率%	8.605	8.558	6.489	23.652

次に、親和動機づけに関する質問項目の全データ（727名）のうち、有効回答された723名について因子分析（主因子法、バリマックス回転）した結果、次の4因子が抽出された（固有値7.363、寄与率30.68%）（表3）。第1因子は下山（1981）で交友関係を維持、拡大しようとする積極的傾向の因子（I）と仲間に対する強調や協力の傾向を示す因子（V）に含まれる項目に高い負荷があり、「積極的友好」と命名した。第2因子は下山（1981）において、仲間からの別離や拒否に対する不安傾向を表す因子（Ⅲ）に対する質問項目に高い負荷があり、「分離不安」と命名した。第3因子

は、第1因子と同様に、下山（1981）において因子（I）、（Ⅲ）、（V）に対応する項目に負荷が高く、「友好拡大」と命名した。第4因子は下山（1981）で、仲間に対する従順や服従の傾向と同様の項目であったため、「従順服従」と命名した。特に第2、第4因子は下山（1981）と同様の結果であった（表3）。本研究では親和動機の全体的な傾向をみるため、すべての項目の合計平均得点を出し「親和平均」という項目を加えて検討した。

表3 児童における親和動機項目の因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	h ²
積極的友好					
1 私は、人からなにかたのまれるとうれしくなる。	.479	.106	.155	.190	.301
3 私は、友だちのたのみはなんでもひきうける。	.491	.005	.170	.095	.279
5 私は、クラスやグループでできたことには、いつもしたがう。	.334	.106	.110	.256	.201
7 私は、人の仕事をてつだうことが好きだ。	.475	.159	.034	.328	.360
13 私は、友だちに自分のことをなんでも話す。	.452	.123	.167	-.066	.252
16 私は、親友のためなら、なんでもしてあげる。	.624	.137	.225	-.119	.474
20 私は、いつも友だちやグループのためになるように努力している。	.448	.176	.243	.343	.408
分離不安					
4 私は、友だちから知らん顔されると、とてもみじめな気持ちになる。	.181	.504	.082	.047	.295
6 私は、家でも学校でも、ひとりであるのはとてもさびしい。	.165	.518	.102	.075	.311
8 学校やクラスがかわったりして、友だちがいなくなると、さびしく思う。	.139	.608	.101	-.050	.402
12 私は、友だちからきられても気にしない。	.082	-.324	-.042	-.062	.118
14 私は、仕事や勉強を、ひとりでするよりも、友だちときょう力してするほうが好きだ。	.178	.335	.168	.083	.172
15 私は、なかのよい友だちといっしょにいてだけで楽しい。	.291	.320	.185	-.062	.225
17 とても仲のよい友だちが、転校していなくなっても平気だ。	-.010	-.439	-.027	-.088	.201
21 私は友だちとけんかしても、すぐに仲直りしたくなる。	.216	.371	.243	.342	.361
友好拡大					
9 私は、人といっしょにるのが好きなので、いろいろな集まりに参加することがよくある。	.277	.114	.380	.144	.255
18 私は、どんな人からも好かれるようになりたい。	.222	.304	.517	.033	.410
22 私は、ほかのグループやクラスの人ともなかよくなりしたい。	.174	.400	.459	.180	.433
23 私は、人とつきあうのがうまいと思う。	.387	-.101	.529	.074	.445
24 私は、初めて会った人でも、その人から好かれるよう努力する。	.294	.221	.605	.166	.529
26 私は、できるだけ友だちをたくさんつくらうとしている。	.125	.353	.421	.147	.339
従順服従					
2 けんかをして、自分が悪かったと思っても、あいてがあやまってくるまでは、あやまらない。	-.086	-.189	-.051	-.471	.267
10 私は、意見の合わない人とは、つきあいたくない。	-.015	-.027	-.067	-.381	.150
11 友だちになりたいと思っても、自分からは、言い出したいくない。	-.021	.069	-.131	-.392	.176
固有意値	2.268	2.144	1.825	1.126	7.363
寄与率%	9.448	8.935	7.603	4.690	30.677

2. IWM得点と親和性得点との関連について

全体のIWM得点と親和性得点の相関を検討したところ、以下の結果が得られた。

「ambivalent」得点は、「積極的友好」「従順服従」得点と有意な負の相関が、「分離不安」得点と有意な正の相関が認められた。「secure」得点は、すべての因子得点と有意な正の相関が得られた。「avoidant」得点は、「分離不安」得点と有意な正の相関が、「積極的友好」「友好拡大」「従順服従」「親和全体」と負の相関が認められた（表4）。

表4 IWM得点と親和性得点の相関（r）

IWM/親和動機	積極的友好	分離不安	友好拡大	従順服従	親和全体
ambivalent	-.104**	.117**	-.065	-.172**	-.018
secure	.408**	.142**	.436**	.192**	.385**
avoidant	-.228**	.251**	-.311**	-.288**	-.345**

*p<.05, **p<.01

3. IWM群分けによる人数（出現率）分布について

上記のようにIWM得点によって分けた3群に不定型群を加え、人数に対するカイ二乗検定の結果（表5）、人数の偏りは有意であった（ $\chi^2(21) = 59.81, p < .01$ ）。

表5 群分けによる人数内訳とカイ二乗検定による有意差 () 内は学年性別群内の%

		3年生男子	3年生女子	4年生男子	4年生女子	5年生男子	5年生女子	6年生男子	6年生女子	合計
両 価 群	実際度数	5 (7)	8(8)	5(6)	3(4)	8(7)	18▲(20)	11(12)	18▲(16)	76
	期待度数	7.1	10.4	8.1	7.5	11.6	9.5	10.1	11.8	
	調整残差	-0.89	-0.85	-1.22	-1.82 [†]	-1.20	3.14**	0.32	2.09*	
安 定 群	実際度数	9 (13)	14(14)	9(12)	22▲(31)	20(18)	8▽(9)	25▲(26)	21(19)	128
	期待度数	12.0	17.5	13.6	12.6	19.5	15.9	17.0	19.8	
	調整残差	-1.01	-1.00	-1.46	3.09**	0.14	-2.34*	2.30*	0.32	
拒 否 群	実際度数	10 (15)	4(4)	11(14)	3(4)	18▲(16)	8(9)	4(4)	5(4)	63
	期待度数	5.9	8.6	6.7	6.2	9.6	7.8	8.4	9.8	
	調整残差	-1.84 [†]	-1.77 [†]	-1.83 [†]	-1.41	3.09**	0.06	-1.70 [†]	-1.73 [†]	
不定型群	実際度数	44 (65)	73▲(74)	52(68)	43(61)	64(58)	56(62)	56(58)	68(61)	456
	期待度数	42.9	62.4	48.6	44.8	69.4	56.8	60.5	70.6	
	調整残差	0.29	2.37*	0.86	-0.46	-1.15	-0.18	-1.03	-0.56	
合 計		68(100)	99(100)	77(100)	71(100)	110(100)	90(100)	96(100)	112(100)	723

▲：有意に多い ▽：有意に少ない †p<.10 *p<.05 **p<.01

その結果、両価群は、5年女子、6年女子が有意に多く、4年女子が少ない傾向であった。安定群は、4年女子、6年男子が有意に多く、5年女子が有意に少なかった。拒否群は、5年男子が有意に多く、3年男子、4年男子は多い傾向であった。また、3年女子、6年男子、6年女子が少ない傾向であった。また、不定型群は3年女子が有意に多かった。図1は学年、性別ごとの出現率を示したものである。

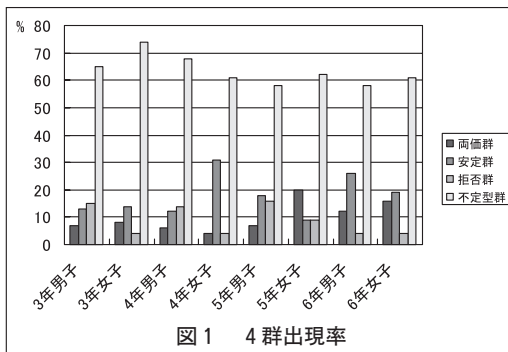


図1 4群出現率

次に男女別にカイ二乗検定を行ったところ、男子は、安定群が6年で有意に多く、拒否群が6年で有意に少なかった ($\chi^2(9) = 15.86$)。女子は、両価群が5年で有意に多く、4年で有意に少なく、安定群が4年で有意に多く、

5年で有意に少なかった。不定型群が3年で有意に多かった ($\chi^2(9) = 27.00$)。

3群の発達的变化をみるため群ごとのカイ二乗検定を行った。その結果、両価群 ($\chi^2(3) = 4.26, ns$)、拒否群 ($\chi^2(3) = 1.01, ns$) は有意差がなく、安定群 ($\chi^2(3) = 12.41, p < .01$) は男子において4年が有意に少なく5年が有意に多いこと、女子において4年が有意に多く、5年が有意に少ないことが認められた。図2で出現率の発達的变化を示した。

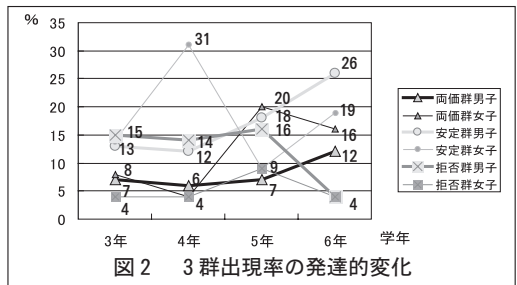


図2 3群出現率の発達的变化

4. IWM 3群と親和動機の関連について

親和動機尺度の各因子ごとの因子得点の平均と標準偏差を計算した。学年(4)×性(2)×IWM 3群(3)の3要因分散分析を行ったところ、二次の交互作用は有意でなく、一次の交互作用が有意な傾向という以下の結果が得

られた(表6)。交互作用の有意な傾向であった。変化を図3と図4で示した。
た、「分離不安」と「従順服従」の発達の變

表6. 親和動機因子得点の群, 学年, 性別平均値 (SD) と分散分析結果

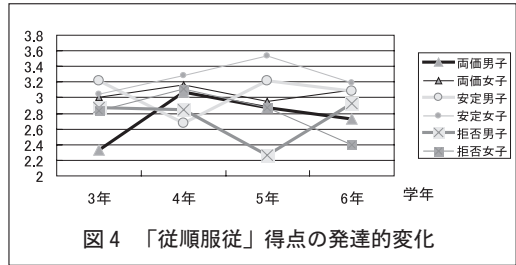
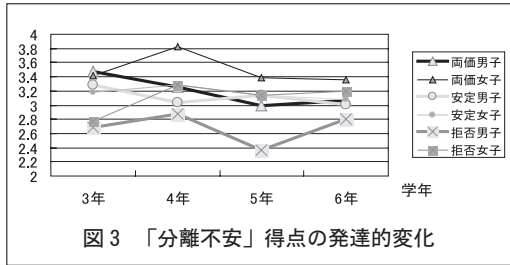
	兩 備 群														
	3年			4年			5年			6年			總和		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
	N=5	N=8	N=13	N=5	N=3	N=8	N=8	N=18	N=26	N=11	N=18	N=29	N=29	N=47	N=76
積極的友好	2.43(.27)	2.70(.22)	2.59(.27)	2.49(.71)	3.19(.22)	2.75(.66)	2.07(.42)	2.42(.47)	2.31(.48)	2.31(.64)	2.69(.47)	2.55(.56)	2.30(.54)	2.62(.46)	2.49(.52)
分離不安	3.48(.30)	3.41(.53)	3.43(.44)	3.25(.55)	3.83(.19)	3.47(.53)	3.00(.62)	3.39(.57)	3.27(.60)	3.06(.72)	3.36(.37)	3.25(.54)	3.15(.61)	3.41(.48)	3.31(.54)
友好拡大	3.23(.62)	3.00(.42)	3.09(.49)	2.70(.67)	3.17(.17)	2.88(.57)	2.77(.52)	2.95(.42)	2.90(.46)	2.71(.47)	3.10(.47)	2.95(.50)	2.82(.55)	3.03(.43)	2.95(.49)
従順服従	2.33(.62)	2.71(.90)	2.56(.80)	3.07(.64)	3.22(.84)	3.13(.67)	2.88(.71)	2.97(.76)	2.94(.73)	2.73(.55)	2.83(.46)	2.79(.49)	2.76(.64)	2.89(.68)	2.84(.66)
親和平均	2.92(.33)	3.01(.20)	2.98(.25)	2.85(.59)	3.35(.155)	3.04(.52)	2.63(.44)	2.93(.38)	2.83(.42)	2.72(.35)	3.01(.30)	2.90(.35)	2.75(.41)	3.00(.33)	2.90(.38)

	安 定 群														
	3年			4年			5年			6年			總和		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
	N=9	N=14	N=23	N=9	N=22	N=31	N=20	N=8	N=28	N=25	N=21	N=46	N=63	N=65	N=128
積極的友好	2.73(.95)	3.14(.60)	2.98(.76)	2.49(.51)	3.09(.52)	2.91(.58)	2.65(.56)	2.66(.65)	2.65(.58)	2.61(.38)	2.75(.33)	2.67(.36)	2.62(.55)	2.94 (.53)	2.78(.56)
分離不安	3.29(.49)	3.18(.48)	3.22(.47)	3.04(.39)	3.29(.46)	3.22(.45)	3.14(.50)	3.14(.49)	3.14(.48)	3.01(.48)	3.08(.42)	3.04(.45)	3.10(.47)	3.18 (.45)	3.14(.46)
友好拡大	2.96(.70)	3.27(.43)	3.15(.56)	3.35(.45)	3.33(.45)	3.34(.44)	3.29(.50)	3.25(.55)	3.28(.51)	3.09(.45)	3.25(.47)	3.16(.46)	3.17(.51)	3.28 (.45)	3.22(.49)
従順服従	3.22(.71)	3.05(.83)	3.12(.77)	2.67(.50)	3.29(.67)	3.11(.68)	3.22(.71)	3.54(.40)	3.31(.65)	3.09(.51)	3.19(.64)	3.13(.57)	3.09(.62)	3.24 (.67)	3.16(.65)
親和平均	2.99(.42)	3.15(.36)	3.08(.38)	2.88(.26)	3.19(.32)	3.10(.33)	3.01(.44)	3.01(.44)	3.01(.40)	2.89(.25)	2.99(.24)	2.93(.25)	2.94(.33)	3.09 (.33)	3.02(.34)

	拒 否 群														
	3年			4年			5年			6年			總和		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
	N=10	N=4	N=14	N=11	N=3	N=14	N=18	N=8	N=26	N=4	N=5	N=9	N=43	N=20	N=63
積極的友好	2.23(.30)	2.50(.59)	2.31(.40)	2.04(.65)	2.52(.33)	2.14(.62)	2.12(.43)	2.48(.38)	2.23(.44)	2.39(.24)	2.83(.67)	2.63(.55)	2.15(.46)	2.94(.51)	2.29(.51)
分離不安	2.68(.47)	2.78(.90)	2.71(.59)	2.88(.53)	3.29(.40)	2.96(.52)	2.37(.69)	3.14(.26)	2.61(.69)	2.81(.53)	3.20(.40)	3.03(.48)	2.61(.61)	3.11(.49)	2.77(.62)
友好拡大	2.43(.33)	2.70(.30)	2.70(.26)	2.70(.27)	2.70(.28)	2.70(.29)	2.70(.30)	2.70(.31)	2.70(.32)	2.70(.33)	2.70(.34)	2.70(.35)	2.70(.33)	2.70(.34)	2.70(.35)
従順服従	2.87(.28)	2.83(1.35)	2.85(.69)	2.85(.64)	3.11(.38)	2.90(.59)	2.26(.76)	2.88(.59)	2.45(.76)	2.92(.74)	2.40(.37)	2.63(.59)	2.61(.69)	2.78(.72)	2.67(.70)
親和平均	2.52(.18)	2.62(.70)	2.54(.37)	2.55(.46)	2.62(.43)	2.28(.42)	2.28(.42)	2.78(.20)	2.43(.43)	2.71(.14)	2.93(.39)	2.83(.31)	2.44(.39)	2.80(.37)	2.56(.42)

	分散分析 F値						交 互 作 用				
	群差	学年差	性差	群*学年	群*性別	学年*性別	群*学年*性別				
積極的友好	9.88**	安定>兩備>拒否	2.67*	3.4,6>5	23.87**	男子<女子	1.47	3.7		.91	.38
分離不安	9.79**	兩備, 安定>拒否	1.59		11.57**	男子<女子	1.01	2.47†	5年 拒否<安定, 兩備, 安定 女子 兩備<安定, 拒否	1.69	.41
友好拡大	21.41**	安定>兩備>拒否	.72		6.37*	男子<女子	1.31	.47		.16	.89
従順服従	7.59**	安定>兩備, 拒否	.77		2.69		1.95†	5年 拒否<安定, 兩備 6年 安定>兩備, 拒否	.17	1.45	.98
親和平均	16.55**	安定, 兩備>拒否	2.18†		21.62**	男子<女子	1.38	1.20		.96	.70

† p<.10, *p<.05, **p<.01



「分離不安」得点（群×性 $F(2, 243)=2.47$ ）と「従順服従」得点（群×学年 $F(6, 243)=1.954$ ）においては、交互作用が有意な傾向であったが、その他の因子得点の交互作用は有意ではなかった。そこでまず、交互作用が有意でなかった各因子についてみていくことにする。

「積極的友好」得点は、群、学年、性の主効果が有意であった。すなわち、群差は安定群>両価群>拒否群（ $F(2, 267)=9.88$ ）、学年差は3, 4, 6年>5年（ $F(2, 267)=2.67$ ）、性差は男子<女子（ $F(2, 267)=23.87$ ）であった。

また、性差が有意であったため、男子と女子のそれぞれの検討を行ったところ、男子では学年差（ $F(3, 131)=1.061$ ）はなかった。群差（ $F(2, 132)=11.277$ ）は、安定群>両価群、安定群>拒否群であった。女子は3, 4年>5年（ $F(3, 128)=7.234$ ）で群差（ $F(2, 129)=7.183$ ）は安定群>両価群、安定群>拒否群で男子と同様であった。

「友好拡大」得点は、群、性の主効果が有意であった。群差は、安定群>両価群>拒否群（ $F(2, 267)=21.41$ ）、性差は男子<女子（ $F(2, 267)=6.37$ ）であった。性差が有意であったが、男子（ $F(3, 131)=.412$ ）と女子（ $F(3, 128)=2.327$ ）のそれぞれの分析では有意な学年差はなかった。群差については、男子（ $F(2, 132)=24.079$ ）は安定群>両価群>拒否群であったが、女子（ $F(2, 129)=11.11$ ）は安定群>両価群、安定群>拒否群であった。

「親和平均」得点は、群、学年、性の主効果が有意であった。群差は、両価群、安定群>拒否群（ $F(2, 267)=16.55$ ）、学年差は、4, 6年>5年（ $F(2, 267)=2.18$ ）、性差は男子<女子（ $F(2, 267)=21.62$ ）であった。性差が有意であったため、それぞれの分析を行ったところ、男子は有意な学年差はなかった（ $F(3, 131)=1.189$ ）が、女子は4年>5年（ $F(3, 128)=3.247$ ）が有意であった。群差については、男子（ $F(2, 132)=23.416$ ）は両価群、安定群>拒否群で、女子（ $F(2, 129)=5.943$ ）は、安定群>拒否群が有意であった。

次に交互作用の有意な傾向が認められた「分離不安」得点における単純主効果を検定したところ、男子は両価群>拒否群、安定群>拒否群が有意（ $F(2, 132)=12.248$ ）であったが、女子は両価群>安定群、拒否群が有意（ $F(2, 129)=4.412$ ）であった。

また、交互作用が有意な傾向を示した「従順服従」得点における単純主効果を検定したところ、5年は両価群>拒否群、安定群>拒否群が有意（ $F(2, 77)=9.872$ ）であったが、6年は安定群>両価群、安定群>拒否群が有意（ $F(2, 81)=5.447$ ）であった。

IV. 考察

1. 親和動機づけ尺度の因子構造について

親和動機づけ尺度からは、4因子が抽出された。これらの項目については、Boyatzis (1973) が指摘した、Aff+に対応する積極的傾向の因子である「積極的友好」「友好拡

大」と、消極的傾向Aff-に対応する交友関係の喪失を恐れる「分離不安」、相手に合わせてしまう「従順服従」の因子が再確認された。特にAff-については下山(1981)と同様の結果であった。久保田(1995)での青年期対象の親和動機においても積極的傾向と、消極的傾向を示す因子が抽出されており、本研究でも親和動機の構造が大きく2つの構成要素を持つことが確認された。

2. IWM得点と親和性得点との関連について

まず全体のIWM得点と親和性得点の相関の結果は、井手(2004)で述べた母子関係との関連と同様、IWM3因子の得点の特徴が反映された。

「ambivalent」得点は、「分離不安」得点と有意な正の相関、「積極的友好」得点や「従順服従」得点と負の相関が有意であり、親和的な対人関係において葛藤状況にあることを示していた。Koback et al (1988)は、「ambivalent」に対応する「とらわれ型」は、“常に疑惑と葛藤の他者関係の方略で、まともつき関係、他者から高い心配を引き出す”としている。久保田(1995)においてもIWMの「ambivalent」得点と、子どもの頃から現在までの母親との関係因子「母親への不信」「過剰適応」「分離不安」に関連があったことから、Koback(1988)で示された疑惑と葛藤の方略には、分離不安が関連していると思われる。母親が、ある時は、受け入れ、ある時は拒否するような一貫性のない応答をする場合、表象は、混沌としたものとなり、状況に応じて子ども自身も変化していく必要にせまられ、子どもはいつも母親の顔色を伺い、目が離せず、「過剰適応」する結果となる。その結果、関係性には不安や不信が伴い、安心して分離できにくくまともつき心性が育

つと思われる。このことから「ambivalent」因子の特徴の根底に「不信」や「疑惑」が関連し、分離不安が生じると思われる。また、坂上・菅沼(2001)は、両価性の高さが、悲しみに対する不快感の高さや喜びに対する覚知の低さと関連し、この喜びの覚知に比して不快情動の経験に意識が向きやすいという偏りが対人関係の不安定さにつながると解釈した。この情動特徴からは「分離不安」「疑惑」「不信」が生じやすく、それがまた常に対人方略を偏りで検索し続けるという循環が生まれていくと思われる。

「secure」得点は、安定的な対人方略で、積極的な親和動機づけが有意な正の相関を示したが、消極的な親和動機づけ(ShIPLEY et al, 1952 下山, 1981参照)とも有意な正の相関が認められた。これは、“苦痛時に支援を得ることで安全感を体感”(Koback et al, 1988)していることから、「secure」因子の特徴が、人と仲良くするための方略として、どちらの動機づけも構成要素として包含しており、統合されているということが考えられる。また、情動特徴として悲しみや喜びに関する覚知が高く、両価群に比して内省傾向が高く、回避群に比して悲しみ喜びに対する不快感を持たない(坂上・菅沼, 2001)ことから、分離不安や従順服従などの消極的な動機づけに対しての志向性も高いと思われる。このことは、友だち作りが活性化する発達のな特徴を持つこの時期には、特に必要な要素といえるかもしれない。

「avoidant」得点は、Koback et al (1988)では“愛着欲求と拒絶の予期を関連づける”表象が特徴とされ、最初から人との親和的な関係を持つことを拒否していると考えられる。本検討においても「secure」得点と対照的に「分離不安」以外の親和動機因子の得点との有意な負の相関が示され、親和動機に対し、

拒否的な対人関係が反映されたと考えられる。久保田（1995）も否定的な感情、信頼、相互依存、情緒的満足のレベルの低さが人と親密になることへの恐れに由来するものとしており、坂上・菅沼（2001）のいう、回避群の特徴である悲しみに対する不快感の高さ、喜びに対する内省や覚知の低さ、不快感の高さ、両価群に比して恐れが感情が高い結果と合致している。根底には不安や恐れが存在すると思われる。

以上の結果は全体的傾向である。この特徴と、後述する群分けによる個人の特徴を比較しながら見ていく必要がある。

2. IWMの群分けによる特徴について

人数分布について、男子と女子で、有意差に違いがあったため、男女別に検討する。

男子は、両価群の分布において有意な偏りはなかった。安定群は、6年男子が有意に多かった。拒否群は、5年が有意に多く、3、4年は多い傾向であった。特に男子のみの分析では、6年で安定群が有意に多く、拒否群が有意に少ないことが示された。

女子は、両価群において、5年女子と6年女子が有意に多く、4年女子が有意に少ない傾向を示していた。特に女子のみの分析では5年生女子が有意に多かった。安定群は、反対に4年女子が有意に多く、5年女子が有意に少なかった。井手（2004）では、IWM因子の分散分析において、女子の「ambivalent」得点が4年<5年（ $F(3, 371)=2.39, p<.05$ ）、「secure」得点が4年>5年（ $F(3, 371)=4.097, p<.01$ ）で、本研究と同様、5年女子と4年女子における様相に特徴が示された。このことから5年女子は、「ambivalent」傾向が高い特徴を持ち、4年女子は「secure」傾向が高い可能性があると思われる。その際、両傾向は反比例となる発達的な動きがあるのかも

しれない。一方、拒否群において有意な偏りはみられなかった。また、3年女子で不定型群が有意に多く、女子においてはIWMの発達が3年では定まらず、混沌としていることが示唆された。以上から、IWMの発達に顕著な節目が存在する可能性があると思われる。

男子と女子は、人数の分布も別の様相が見られた。男子は両価群の偏りがなく、女子は拒否群の偏りがみられなかった。男子と女子ではIWMの質の発達的な様相が異なると思われる。

このことは、井手（2004）での数値的検討においても考察したように、幼時期の延長としての母子関係から分離的な母子関係への発達が、男子は女子に比して早期から強く示され、母親からの分離が早く始まる（宮本、1997）ため、男子は「avoidant」傾向が高く、それが人数分布にも反映されていると考えられる。また、女子の人数分布の様相が、全体的な数値傾向と同様の様相であることは、4年と5年の「ambivalent」得点と「secure」得点の特徴が、相まって影響しあいながら発達すると思われる（井手、2004）女子の特徴を裏付けるとも考えられる。

3. IWM 3群と親和動機尺度との関連性

前述したIWMの全体因子得点と親和動機得点との相関の結果は、IWM因子のそれぞれの特徴を反映するものであった。

ここでは、個人の特徴として、親和動機尺度とどのような関連があるかを検討する。

「従順服従」得点以外の因子において性差が有意（男子<女子）であった。Eisenberg, N.&Lennon, R（1983）が、共感性における調査の場合にほとんどの研究で女子の方が男子よりも共感性が高い結果が得られていると指摘した（堂野、1999参照）ように、女子が男子より親和度が高いという結果は多く報

告されている（宮本・加藤，1975・青柳・斉藤，1984・堂野，1999）。特に下山（1981）が小学生からすでに女子が男子より親和動機得点が高いという性差を認めているように、本研究においても同様の傾向が示されたことは、親和動機における男女の発達の違いが示唆される。

「積極的友好」得点は、男子に学年差がなかったが、女子は3，4年>5年が有意であった。また、「親和平均」得点は、男子に学年差がなく、女子は4年>5年が有意であった。いずれも5年が低い得点であったことは、5年女子において両価群が有意に多いことが影響していると思われる。よってこれらの因子については、男子は群に影響され、個人差が大きく、女子は発達の要因が影響されると思われる。

「友好拡大」得点は、学年差がなく、男子は安定群>両価群>拒否群が有意で女子は安定群>両価群、拒否群であったことから、男女とも群に影響されるが、様相に性差が認められた。女子の両価群は、拒否群と有意差がないのは、5年女子の特徴が反映しているかもしれない、今後の課題として興味深い。

「分離不安」得点は、交互作用が有意な傾向で、男子は両価群>拒否群、安定群>拒否群が有意で、女子は両価群>安定群、両価群>拒否群が有意であった。全体的な相関においても「ambivalent」得点と「分離不安」得点は正の相関があったが、個人の特徴として検討した場合、両価群は男女ともに「分離不安」得点が高く、特に女子において安定群より高いなどその特徴が顕著であることが示唆された。竹澤・小玉（2000）は、愛着の型が認知的な枠組みとして、愛着関連のエピソードだけでなく、ストレス（自我脅威的刺激）に対する反応にも影響すること（回避型はネガティブな感情を喚起したエピソードの

嫌悪感が低く、アンビバレント型は思い出しやすく、嫌悪感が高かった）を示し、各型の特徴を示唆した。そのなかで、回避型の嫌悪感の低さは、ネガティブな感情を喚起する対人エピソードを抑圧する回避的な対処をした結果であるとし、アンビバレント型はこれらに固執しとられる対処スタイルを示す結果嫌悪感も高いことが示された。このことは、本研究の上記の結果において、両価群の分離不安得点が高く、拒否群の得点が低いことにも対応するものである。両価群は、特徴的な分離不安に対するネガティブな感情が喚起しやすく、嫌悪感が高くなった結果、そこにとられる方略をとるため、この項目の得点が高くなるのではないだろうか。

「従順服従」得点は、学年と群における交互作用が有意な傾向で、学年別にみえていくと、5年において両価群>拒否群、安定群>拒否群が有意で、6年において安定群>両価群、拒否群が有意であった。学年による得点の傾向の違いが、5年と6年であったことについて、「従順服従」得点が、発達によって影響されることが考えられる。特に5年女子に両価群が多いこともあいまって、この学年に違いが出ているかもしれない。

以上のように、IWMの群の個人得点と児童期の親和動機得点の関係は、各因子で性差や群差があり、親和性の構造に男女差があることが示された。また、群差において青年期の対人方略と同様の特徴を示していたことは、児童期にすでに、IWM3つの型の持つ対人方略の特徴が親和動機にも反映されていることを示唆しており、先行研究（井手，2004）と同様、IWMの各因子の特徴的な表象が、徐々に安定しつつあると考えられる。

V. まとめと今後の課題

児童期における I WMの個人的特性を検討した結果、両価群、安定群、拒否群の人数分布に以下のような有意な偏りが認められた。両価群は5、6年女子が多く、安定群は6年男子、4年女子が多く、5年女子が少なかった。拒否群は5年男子が多く、不定型群は3年女子が多かった。

また、親和動機得点との関係を検討した結果、「ambivalent」得点は「積極的友好」「従順服従」と負の相関が、「分離不安」と正の相関が示された。「secure」得点はすべての因子と正の相関が示され、「avoidant」得点は「分離不安」と正の相関が、それ以外の因子と負の相関が示された。

さらに I WM 3群と親和動機得点との発達の傾向を検討したところ、男女で異なる特徴が示された。「分離不安」得点と「従順服従」得点は交互作用が有意な傾向を示し、5年女子の両価群得点に特徴が示された。「積極的友好」「親和平均」因子においても5年女子に特徴が示され、男子は学年差がなく、群差が示された。さらに3群は、青年期と同様の対人方略の特徴を示した。

今後の課題として、男女の I WMの発達の相違、特に不定型群の多かった3年女子と両価群の多かった5年女子における I WMの構造や発達の様相を検討することが必要であると思われる。これらを追求することが、臨床場面への応用に役立つかもしれない。

本研究は、児童の I WM特性を質問紙によって検討したものであるが、今後は更に児童期全体の検討を深めるため、I WMの質や構造についての発達の様相を明らかにすることが課題である。そのため、尺度の再検討、および半構造面接や継続的な縦断研究等の方法を開発し、児童期における研究の質を高めることが望まれる。

【付記】

本論文は、1998年度金城学院大学大学院人間生活学研究科修士論文の一部を、加筆修正したものである。

本論文作成にあたり、貴重なご助言ならびにご指導をいただきました金城学院大学内藤徹名誉教授をはじめ、松田惺教授、松本真理子教授、幾多のご指導を賜りました諸先生・諸先輩方に、心より感謝申し上げます。

また、調査を快くお引き受け下さいました各小学校の校長先生・先生方・児童・保護者の皆様などご関係者に、末筆ながらこの場をお借りして、心より厚くお礼申し上げます。

参考文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978): Patterns of Attachment A psychological study of the strange situation Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 青柳肇・斉藤浩子 (1984) : 成功回避動機に関する研究 その9 - 親和動機との関連 -, 立川短期大学紀要, 17, 21-28
- Atkinson, J.W., Heyns, R.W., and Veroff, J. (1954) : The effect of experimental arousal of the affiliation motive on thematic apperception, J. abnorm. Soc. Psychol, 49, 405-410.
- Ausubel, D.P., Balthazar, E, E., Rosenthal, I., Blackman, L, S., Schpoont, S., H.& Welkowitz, J. (1954) : Perceived Parent Attitudes as Determinants of Children's Ego Structure, Child Development, 3, 173-183.
- Bowlby, J. 黒田実郎・大羽奏・岡田洋子・黒田聖一(訳)(1991) : 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社
- [Bowlby, J. (1969) : Attachment and Loss, vol.1 Attachment. London : Hogarth]
- Bowlby, J. 黒田実郎・大羽奏・岡田洋子・黒田聖一(訳)(1982) : 母子関係の理論 II 分離不安 岩崎学術出版社
- [Bowlby, J. (1973) : Attachment and Loss,

- vol.2 Separation Anxiety and Anger. London : Hogarth]
- Bowlby, J. 黒田実郎・大羽奏・岡田洋子・黒田聖一(訳)(1981) : 母子関係の理論Ⅲ 愛情喪失 岩崎学術出版社
- [Bowlby, J. (1980) : Attachment and Loss, vol.3 Loss : Sadness and preSSION.London: Hogarth]
- Bretherton, I. (1985) : Attachment Theory : Retrospect and prospect. Growing Pointsof attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development, 50(1-2, Serial No.209). 2-35.
- Cassidy, J. (1988) : Attachment and the self in six-year-olds.Child Development, 59, 121-134.
- 堂野恵子 (1999) : 小学生の向社会性の発達における共感性および仲間に対する親和性の効果 安田女子大学大学院女子大学大学院博士課程完成記念論文集, 167-177.
- Eisenberg, N.&Lennon, R. (1983) : Sex difference in empathy and related capacities. Psychological Bulletin, 94, 100-131. (堂野, 1999参照)
- 遠藤利彦 (1992a) : 愛着と表象-愛着研究の最近の動向-内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観 心理学評論, 35, 201-233.
- 遠藤利彦 (1992b) : 内的作業モデルと愛着の世代間伝達 東京大学教育学部紀要, 32, 203-220.
- 遠藤利彦・江上由実子・鈴木さゆり(1991) : 母親の養育意識・養育行動の規定因に関する探索的研究 東京大学教育学部紀要, 31, 131-152.
- 遠藤利彦 (企画者)・菅原ますみ(司会者)・数井みゆき・園田菜摘・小林隆児(話題提供者) 1998 関係性を通して見る子どもの社会情緒的発達日本発達心理学会第9回大会 発表論文集, s20 (抄録).
- Grossmann K.E. & Grossmann K. (1991) : Attachment quality as an organizer of emotional and behavioral responses in a longitudinal perspective. In Parkes, C. M., Stevenson, H. J., Joan. M. P., Attachment Across The Life Cycle New York: Routledge. Pp.93-114.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987) : Romantic Love Conceptualized as an Attachment Process. Journal of Personality and Social Psychology, 52, 511-524.
- 古屋敬子 (2002) : 外界および自己についての情報処理に関する一考察-内的ワーキングモデルの観点から- 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 494-506.
- 井手裕子 (2004) : 児童期における内的作業モデルの検討-発達の側面を中心に- 金城学院大学心理臨床相談室紀要, 4, 3-11.
- 石田勢津子 (1995) : 社会性の育ちと形成 岩田純一・佐々木正人・石田勢津子・落合幸子(著) ベーシック現代心理学 3 児童の心理学 (株)有斐閣
- 岩田純一 (1995) : 発達のなかの児童 岩田純一・佐々木正人・石田勢津子・落合幸子(著) ベーシック現代心理学 3 児童の心理学 (株)有斐閣
- Kobak, R.R., & Sceery, A. (1988) : Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation and representations of self and others. Child Development, 59, 135-146.
- 小石寛文 (1995) : 人間関係の発達心理学 3 児童期の人間関係 (株)培風館
- 近藤清美 (1993) : 乳幼児におけるアタッチメントの測定 発達心理学研究, 4, 08-106.
- 久保田まり (1995) : 青年期におけるアタッチメント関係および対人関係に関する認識と親和傾向との関連 秋田経済法科大学経済学部紀要, 21, 45-55
- 久保田まり (1997) : アタッチメントの研究 : 内的作業モデルの形成と発達 川島書店
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985) : Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the level of representation. Growing Point of Attachment Theory and Research, Monographs of the Society for Research in Child Development, 50(1-2, Serial No.209.), 66-102.
- 前田研史 (1992) : 学童期 加藤豊比古(編著)人間行動の基礎と諸問題-ヒトはどのように生きていくのか-生涯発達と問題行動 2節 福村出版, 204-216.
- Morgan, C.D. & Murry, H.A. (1935) : A

- method For investigating fantasies, Arch. Neurol. Psychiat., 34, 289-306.(宮本美沙子・加藤千佐子, 1975参照)
- Mehrabian, A. & Ksionzky, S. (1974) : A Theory of Affiliation. Lexington Books.
- 宮本邦雄 (1997) : 児童における内的作業モデルと母子関係 東海女子大学紀要, 17, 181-197.
- 宮本美沙子・加藤千佐子 (1975) : 達成動機と親和動機との関連について 日本女子大学紀要 家政学部, 22, 23-28.
- 坂上裕子・菅沼真樹 (2001) : 愛着と情動制御－対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連－ 教育心理学研究, 49, 156-166.
- 佐藤徳 (1998) : 内的作業モデルと防衛的情報処理 心理学評論, 41, 30-56.
- 繁多進 (1988) : 母子関係研究の展望 心理学評論, 31, 4-19.
- 繁多進 (1997) : 愛着の発達 大日本図書
- 下山剛 (1981) : 達成動機づけの教育心理学 金子書房
- Shiplay, T.E.Jr. & Veroff, J. (1952) : A Projective measure of need for affiliation. J. Exp. Psychol., 43, 349-356. (下山, 1981参照)
- 竹澤みどり・小玉正博 (2000) : 大学生における愛着スタイルとネガティブな対人記憶想起との関連 筑波大学臨床心理学論集, 15, 29-37.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988) : 愛着理論からみた青年期の対人態度－成人版愛着スタイル尺度成の試み－ 東京都立大学人文学報, 196, 1-15.
- 田中祐次 (1981) : 仲間関係と社会化 児童心理学の進歩, 20, 123-147.
- 戸田弘二 (1991) : Internal Working Model 研究の展望 北海道大学教育学部紀要, 55, 133-143.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1997) : 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響-積極的拒否型の養育態度の観点から- 教育心理学研究, 45, 173-182